

中世に於ける琉球國と南海諸國との通交

虎頭民雄

琉球國は初め北山・中山・南山に分れ中山王が最も勢力が強く、洪武五年（一三七二）明の太祖の招きに応じて中山王察都は弟泰期を遣わし、やがて盛んに明に入貢することになり、その貢献方物を調進するために南海諸國との間に交易を開くことになった。

当時の琉球外交文書集である「歴代宝案」に見える最初の南海諸國との通交は、三山統一後十四年を経た我が応永廿六年（一四一九）三隻の海船を使者阿乃佳等の下に暹羅に遣わしたのを以てする。（註一）

（註一）「歴代宝案」卷四十洪武元年付琉球國↓暹羅國咨文「永樂十七年蒙差使者阿乃佳等坐駕海船三隻貢捧礼物前到暹羅國云々」

それ以後元龜三年（一五七二）までの約百五十年間に、暹羅國へ四五回五七隻、旧港へ四回四隻、爪哇へ五回六隻、滿刺加へ一七回一九隻、蘇門答刺へ三回三隻、仏大泥へ一〇回一〇隻、安南へ一回一隻、巡達へ二回二隻計一〇二隻（内三隻は兼行）に及んでいる。（註二）

（註二）小葉田氏「足利時代琉球との政治的及び経済的關係」（第三回）史学雜誌四八ノ四

年	次	暹羅	旧港	爪哇	滿刺加	蘇門答刺	佛大泥	安南	巡達
一四一九	應永二六	三							
一四二五	永樂一七	二							
一四二六	洪武元	二							
一四二七	三三	一							
一四二七	三四	二							
一四二八	宣德二	二							
一四二八	正長元	一	一						
一四二九	永享元	二							
一四三〇	元四	一							
一四三一	二五								
一四三二	三六								
一四三三	四七								
一四三四	五八	三							
一四三五	六九	二							
一四三六	七〇	一							
一四三七	八正統元	一							
一四三七	九二								

暹羅を始めとする南海諸国の明への貢物として規定されていたものは、大体に於いてそれらの国々の土産のものであつた。(註³)

(註3) 「大明会典」卷之一百五、礼部六十三

「安南」金銀器皿、犀角、象牙、白絹、薰衣香、降直香、沈香、速香、木香、黑線香、紙扇、

「暹羅」象牙、犀角、犀角、孔雀尾、翠毛、龜筒、六尺龜、寶石、珊瑚、金戒指、片腦、米腦、糖腦、腦油、腦柴、檀香、速香、安息香、黃熟香、降真香、羅斛香、乳香、樹香、木香、烏香、丁香、薔薇水、碗石、丁皮、阿魏、紫梗、藤竭、藤黃、硫黃、沒藥、烏爹泥、肉豆蔻、胡椒、白豆蔻、華菱、蘇木、烏木、大楓子、苾布、細紅布、白纏頭布、紅撒哈刺布、紅地紋節智布、紅杜花頭布、紅辺白暗花布、乍連花布、烏辺葱白暗布、細棋子花布、織人象花文打布、織雜絲打布、紅花絲手布、剪絨絲雜色紅花被面、織人象雜色紅花文絲縵

「爪哇」火雞、鸚鵡、孔雀、孔雀尾、翠毛、鶴頂、犀角、象牙、玳瑁、龜筒、寶石、珍珠、薔薇露、奇南香、檀香、麻藤香、速香、降香、木香、乳香、黃熟香、安息香、烏香、龍腦、丁皮、沒藥、肉豆蔻、白豆蔻、藤竭、血竭、蘆薈、阿魏、大楓子、番子藍子、華澄茄、華菱、悶虫藥、黃臘、番紅土、烏爹泥、金剛子、碗石、錫、西洋鉄、摺鉄刀、鉄鎗、苾布、油紅布、蘇木、烏木、胡椒

「三佛齊」(旧港)火雞、五色鸚鵡、孔雀、龜筒、黑熊、白獺、諸香、米腦、苾布、兜羅綿被、肉豆蔻、香油子、胡椒

「蘇門答刺」馬、犀牛、龍涎、寶石、瑪瑙、水晶、石青、四々青、錫、硫黃、番刀、弓、撒哈刺、梭眼、木香、丁香、降真香、沈速香、胡椒、蘇木、

「滿刺加」犀角、象牙、玳瑁、瑪瑙珠、鶴頂、金母鶴頂、珊瑚、樹、金鑲戒指、鸚鵡、黑熊、黑猿、白兎、鎖服、撒哈刺、白苾布、薑黃布、撒都細布、西洋布、花縵、薔薇露、梔子花、烏爹泥、蘇合油、片腦、沈香、乳香、黃速香、金銀香、降真香、紫檀香、丁香、樹香、木香、沒藥、阿魏、大楓子、烏木、蘇木、番錫、番塩、黑小厮

ところが、琉球国への規定は次の通りであつた。

馬、刀、金銀酒海、金銀粉匣、瑪瑙、象牙、螺殼、海巴、攪子扇、泥金扇、生紅銅、錫、生熟夏布、牛皮、降香、木香、速香、丁香、檀香、黃熟香、蘇木、烏木、胡椒、硫黃、麻刀石、即ち琉球の場合は硫黃を除くその他の大部分の物は、日本産のものでなければ南海産のものであつた。

それ故これらの進貢の方物を調えるために南海諸国との交易を開くことになつたのである。その遣わした客文の形式は大体一定の形をしたものであるが、正徳を境として二の形式に分れてゐる。

(イ) 宣徳二年九月十七日暹羅国への咨文(歴代宝案卷之四十)

琉球国中山王為

進貢事為照本國稀少貢物今遣正使実達魯等坐駕勝字号海船一隻

裝載磁器等物前到

貴国出産地面收買胡椒蘇木等貨回国応用除外專備礼物

詣前奉獻少伸遠意仍希海納煩念四海一家從容貿易早為發趕趁風
迅回國便益今將礼物數目開坐于後

織金段五匹 素段式拾四

硫黃三千斤今報式千五百斤正

腰刀五柄 摺紙扇三十把

大青盤式拾箇 小青盤四百箇

小青碗式千箇

右 咨

暹羅國

宣德式年九月十七日

(口) 正德四年八月十八日暹羅國出產地面への執照(歷代宝案卷之四十二)

琉球国中山王尙真為

進貢等事切照本國產物稀少缺乏貢物深為未便為比今遣正使勿頓
之玖通事梁敏等坐駕寧字号海船壹隻裝載磁器等物前往暹羅國
出產地面兩平收買蘇木胡椒等物回國預備下進

貢

大明天朝所擬今差去人員別無文憑誠恐到處官司盤阻不便王府除外
今給玄字壹百柒拾式号半印勘合執照付正使勿頓之玖等收執前
去如遇經過關津把隘去処及沿海哨官軍驗實即便放行毋得晉難
因而遲悞不便所有執照須至出給者

今開

正使耆員 勿頓之玖

副使式員 飯土 參魯母

通事式員 梁敏 蔡樟

火長 林椿

管船直庫 麻加尼

稍水共乙百式拾名

正德四年捌月拾捌日

右執照付正使勿頓之玖通事梁敏等准此

爲進 執照
貢等事

正徳の初めの頃を境にして二の形式に分れていることは、何か
の意味があると思われるがよく分らない。ともかく右の二文にお
いて共通している事實は、琉球国から明へ進貢しようとしている
が、本國は産物が少なく、そのために今船を遣わし磁器等の物を
装載させて「蘇木胡椒等」を買つて帰ろうとすると云うことであ
る。明へ進貢することが琉球の南海への発展の原動力となつてい
ることを示すものと云えるであらう。

一、暹羅との關係

暹羅への咨文は四九通、暹羅からの咨文は七通を「歷代宝案」
の中に数える。而して殆んど連年のように使船を派遣し、暹羅の
使船も数は少なかったがあつたらしい。(註4)(註5)

暹羅との往来がこのように頻繁な理由は、第一に地理的条件で
あつた。即ち琉球を出帆した船は福建広東の沖を通り、安南の東
海岸を南下して暹羅に達する。安南との通交が只一回に止つてい
るのは、この地が土産の物も少なく且暹羅程文化が進んでいなか

つたためであらう。このことは暹羅につぐのが満刺加、仏大泥であることによつても知られるであらう。次に暹羅は物産が豊かで殊に蘇木胡椒を多く産し、この地から更に南下して他の地に行く必要はあまりなかつたと思われる。第三に暹羅の明への貢物の中に硫黄があつたことで、琉球船は往路は自国産の硫黄を満載して南下し、帰路は蘇木等を積載して北上したのであつて、両国は互に有無相通じて年々の交通盛んなものがあつたのである。

盤、小青碗の支那物、本国産の硫黄が咨文に見え、それ／＼の量も大体一定していたのであるが、勿論咨文にあらわれたのは、日明貿易における国王進獻物に相当するものであつて、これら以外に種々雑多な貨物もたらされたと考えなければならない。

暹羅からの使者は「歴代宝案」中には成化十六年（一四八〇）の正使秦閔英謝智、副使秦曾謝智、通事秦榮の一行と、成化十七年（一四八一）の秦納の一行とをみるだけで、事実暹羅から琉球への遣使はそれほど多くはなかつたことと思われる。

（註4） 琉球↓暹羅、咨文

執照	日付	正使	通事	船名	官段	素段	硫	黃	腰刀	扇	大青盤	小青盤	小青碗
洪熙元	一四二五	佳期巴那	梁復	仁字	五匹	二〇匹	報二三五〇〇〇斤正	五把	三〇把	二〇個	四〇個	二〇〇個	
〃	〃	浮那古		義	五	二〇	報二三五〇〇〇斤正	五	三〇	二〇	四〇	二〇〇	
二	一四二六	南者結制		勝	五	二〇	報二三五〇〇〇斤正	五	三〇	二〇	四〇	二〇〇	
宣德二、九、一七	一四二七	実達魯		盤	五	二〇	報二三五〇〇〇斤正	五	三〇	二〇	四〇	二〇〇	
(三) 九、二		浮那古		洪	五	二〇	報二三五〇〇〇斤正	四	二〇	二〇	四〇	二〇〇	
四、一〇、一〇	一四二九	有南結制		恭	五	二〇	報二三五〇〇〇斤正	四	二〇	二〇	四〇	二〇〇	
〃	〃	南者結制			五	二〇	報二三五〇〇〇斤正	四	二〇	二〇	四〇	二〇〇	
六、九、三	一四三一	郭伯茲每			五	二〇	報二三五〇〇〇斤正	五	三〇	二〇	四〇	二〇〇	
七、九、九	一四三二	由南結制	鄭智		五	二〇	報二三五〇〇〇斤正	五	三〇	二〇	四〇	二〇〇	

五、八、一五	〃	成化元、八、一五	〃	天順八、八、九	七、一〇、五	四、四、九	三、一〇、四	〃	二、八、一六	正統元、一〇、一	一〇、九、一二	〃	九、九、二六	八、一〇、三	〃	八、九、一八	七、九、三〇
一四六九	〃	一四六五	〃	一四六四	一五〇二	一四三九	一四三八	〃	一四三七	一四三六	一四三五	〃	一四三四	〃	〃	一四三三	〃
詭詩	〃	崇嘉山	達古是	亞斯美	阿普斯古	欲沙每	明泰	欲沙每	步馬結制	欲沙每	阿普尼是	阿普尼是	步馬結制	阿蒲察都	益沙每	均周佳	步馬結制
魏鑑	〃	田泰	紅英	鄭彬元	沈志良	沈志良	鄭智	鄭智	梁德仲	梁德仲	鄭智			梁袖	鄭智	梁德仲	梁德仲
安 勇 安 順 勇																	
五	禮物合前一樣	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五	五
二〇		二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
二五〇〇		二五〇〇	二五〇〇	二五〇〇	二五〇〇	二五〇〇	二五〇〇	二五〇〇	二五〇〇	二五〇〇	二五〇〇	二五〇〇	二五〇〇	二五〇〇	二五〇〇	二五〇〇	二五〇〇
					秤	報	白	花	段	四	四			報		報	
					〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇	〇〇〇〇
					小	小	小	小	小	小	小	小	小	正	小	小	小
五		五	五	五	五	五	五	五	五	五	五		五	五	五	五	五
三〇		三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
二〇		二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
四〇〇		四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇	四〇〇
二〇〇〇		二〇〇〇		二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇	二〇〇〇

執照日付		正使	通事	船名	勘合符	副使	火長	稍水	管船直庫
正德 四、八、一八	四、一〇、九	鄭 玖	梁 敏	寧	玄一七二	參 魯	林 椿	一二〇名	麻 加 尼
七、八、一三	一五一二	益 沙 每	高 義	義	玄一九二	梁 三	梁 貴	二三二	烏 是
八、八、七	一五一三	馬 參 魯	高 義	康	玄一九五	馬 七	紅 瑞	二二二	陳 景
九、八、一三	一五一四	吾 刺 每	高 義	義	玄二〇一	馬 引	梁 敏	二二八	化 奇 錢
一〇、八、一三	一五一五	麻 加 尼	紅 瑞	壽	玄二〇四	馬 越	梁 瑞	二一九	陶 魯
一二、九、一五	一五一七	亞 佳 周	高 義	信	玄二一一	馬 美	紅 芝	一一一	紐 古
一三、九、一八	一五一八	麻 美 子	梁 任	信	玄二一六	馬 五		一五三	紐 古
〃	〃	馬 布 度	鄭 迪	福	玄二一五	達 魯 每	陳 詔	一三八	椰 麻 渡
一五、八、一九	一五二〇	馬 沙 皆	高 達	信	玄二二三	野 麻 度	沈 禮	一六三	馬 寧 久
一六、九、七	一五二一	椰 末 度	蔡 樟	智	玄二二八	馬 三 魯	陳 宜	二一三	馬 尼 理
嘉靖 五、八、一五	一五二六	馬 密 志	程 儀	智	玄二三九	馬 嘉	田 輝	一八九	馬 皮 彼
八、八、一五	一五二九	陶 美	程 棟	地	黃八	毛 是	陳 浩	一五三	馬 加 尼
一二、八、二〇	一五三三	王 金	林 喬	天	黃一八	馬 五	沈 祥	一五〇	鄔 羅 瑞
一五、八、一四	一五三六	馬 三 魯	林 喬		黃二七	賈 滿	金 鼎	一四〇	大 刺
一六、八、二〇	一五三七	馬 密 子	沈 米	宙	黃三三	麻 加 班	金 石	一三八	鄔 羅 遂
一七、一〇、三	一五三八	馬 加 尼	蔡 慶	宇	黃三四	宋 邁	梁 棟	一七四	吳 刺

一九、九、一二	一五四〇	毛是	蔡朝	黃三九	賈滿路	蔡延貴	一三四	鄔羅瑞
二〇、九、七	一五四一	賈滿度	梁顯元	黃四四	壽達路	陳繼章	一四五	吳刺水
二九、一〇、八	一五五〇	邁志刺	金鼎	黃六一	馬普度	程偉	一六三	馬吾刺
三三、九、六	一五五四	馬沙每	陳文章	黃七一	馬達魯	梁明	一七三	勿尼奴其提
四三、一〇、八	一五六四	賈佳梓	沈繼	字二三	馬羅璧	林世泰	一六〇	吳都郎
鄭文								
洪宙								

(註5) 暹羅↓琉球、杳文

執照目付	発信者	使節	進	献	物
宣德 五、三、二一	暹羅國王		蘇木三〇〇〇觔	祐紅布二〇匹	剪絨花氈二その他
成化 一六、三、二三	暹羅國王	正使 奈閣英謝暫	回二〇三〇〇〇觔	一〇匹	香花紅酒二
"	〔禮部尙書屋把囉〕 〔摩訶薩陀烈〕	副使 奈曾謝暫	一〇〇〇〇〇〇觔		西洋紅布二その他
一六、四、一二	長者名下奈羅恩利	通事 奈榮			紅酒一
"	長史蕭奈悅				〔綠鑽袱一上水花布一〇〕 香花酒一その他
成化 一七、三、一五	暹羅國王	奈納	三〇〇〇觔	一〇匹	香花酒上一 香花酒五
"	暹羅國王		三〇〇〇〇〇	一〇〇〇〇	香花酒上一 香花酒五

二、滿刺加との関係

暹羅について頻繁に往来したが、その派遣がポルトガル人のマ

ラッカを占領した一五一一年を以て杜絶したことは注目すべきである。

こゝへもたらした物はやはり暹羅と同一であり、その要求した

物もやはり蘇木胡椒等であつた。満刺加から琉球への文書は六通であるが、満刺加自身使節を派遣した記載は見当たらない。成化十六年三月二日付の樂作麻拿の琉球国王への書に、腰刀一把

を賜わらんことを願っているのは日本刀の価値を示すものであらう。(註6)

(註6) 琉球↓満刺加咨文

執照目付	正使	副使	通事	船名	色段	青段	腰刀	扇	大青盤	小青盤	青碗
天順 七、八、四 一四六三	吳実賢	嘉明	田傑恭	恭字号	五匹	二匹	五把	三把	二個	四個	二〇〇〇
成化 元、八、一五 一四六五	阿普察都	魏謨	蔡回保	勝	五	二〇	五	三〇	二〇	四〇〇〇	二〇〇〇
二 一四六六	諒詩	安謨	蔡回保		五	二〇	五	三〇	二〇	四〇〇〇	二〇〇〇
三、八 一四六七	沈満布	阿布薩	林昌保		五	二〇	五	三〇	二〇	四〇〇〇	二〇〇〇
四、八、一五 一四六八	安遠路	那志	林昌保		五	二〇	五	三〇	二〇	四〇〇〇	二〇〇〇
五、八、一五 一四六九	阿普斯	沈志	林昌保		五	二〇	五	三〇	二〇	四〇〇〇	二〇〇〇
六、 一四七〇	安遠路		陳泰		五	二〇	五	三〇	二〇	四〇〇〇	二〇〇〇
八、九、二〇 一四七二	王達魯		陳泰		五	二〇	五	三〇	二〇	四〇〇〇	二〇〇〇
八、九、二八 〃	沈満志		陳耀		五	二〇	五	三〇	二〇	四〇〇〇	二〇〇〇

執照目付	正使	副使	通事	船名	勘合符	火長	管船直庫	稍水
正徳 四、八、一八 一五〇九	鄭玖	馬沙夔	鄭俊	信	玄一七五		烏是	一五〇人

五、八、一九	一五一〇	王麻不渡	麻加	高	義	蔡	馬	二〇〇
六、八、一三	一五一	馬彼此	也麻美都	高梁	康	梁	不他	二〇三
			魯尼	賢	玄一八一	迪	三魯	

滿刺加↓琉球、回咨

回咨目付	禮	物
成化 三、三、一〇	布五〇匹	好三連打□二〇匹、椒達布一〇匹、□達布九匹、南噴哪布一一匹
五、一、二六	五〇	別布好咱一一、別底咱一九、南母掌一〇、山南八好咱五、左達五
六、二、	五〇	山南不一〇、生已杀一〇、南母□一〇、山南不文地理一〇、火外一〇
六、三、	五〇	曙哪哩一、細紹達布四、苾布五、紹達布四〇
一六、三、一二	一四八〇	〇（刀劔を乞う）
一七、三、	一四八一	古地布二〇 林母拿拾一二、星機指一四、山南不四

○「我王殿下乞賜要刀一把榜身一↑馬鞍一付……」

三、爪哇、仏大泥、蘇門答刺、巡達との関係

「歴代宝案」中に見える咨文は、蘇門答刺へ三通、巡達へ二通、仏大泥へ八通、爪哇へ六通を数え、これらの国からの咨文は

見当らない。

そしてこれらの国への貿易品及び要求した物は前二者の場合と全然同一である。（註）

(註7) 琉球↓蘇門答刺、咨文

執照目付	正使	副使	通事	船名	色段	青段	腰刀	扇	大青監	小青監	小青碗
天順七、八、四 成化三、八、 四、八、一五	一四六三 一四六七 一四六八	達古是 鄔普察都 巴那仕古	游那任 宋那紀 魏古紀 沈滿志	紅田 紅田 春英	安	五 二〇	五 五	三〇 三〇 三〇	二〇 二〇 二〇	四〇〇 四〇〇 四〇〇	二〇〇〇 二〇〇〇 二〇〇〇

琉球↓巡達、咨文

執照目付	正使	副使	通事	火長	直庫	稍水	船名	勘合符
正德八、八、七 一三、九、一八	一五一三 一五一八	馬參魯 麻美子	吾奇刺 高馬義	紅瑞 紅英	化奇錢 紐古	二二二 一五三	康 信	玄一九五 玄二一六

琉球↓佛大泥、咨文

執照目付	正使	副使	通事	火長	直庫	稍水	船名	勘合符
正德一〇、八、一二 一一、九、一三 一四、八、一七	一五一五 一五一六 一五一九	毛是 栢古 馬勃都	吳參 馬山 馬陶	宗遂 沈禮 陳宜	南比 南比	二〇九 二三八 二〇五	寧 壽 寧	玄二〇五 玄二〇八 玄二二〇

琉球↓爪哇、咨文

一五、八、一九	一五二〇	馬勃都	馬陶魯	鄭英	二三一	玄二二四
嘉靖五、八、一五	一五二六	白達魯	馬志良	梁傑	二〇九	玄二四〇
八、二、一一	一五二九	馬沙開	馬吾刺	梁盛	九〇	黃四
九、八、二一	一五三〇	益沙每	馬他良	梁椿	一三	黃九
二二、九、二八	一五四三	邁益紗	馬羅皆	金朝鼎	二一二	黃四八
				蔡梁林梁宗梁王鄭		
				朝		
				鼎慶顯椿盛傑遂傑英		
				林紅田紅宗		
				華芝輝芝遂		
				麻吳林閣南		
				別刺五班比		
				度每郎那		
				仁天義仁寧		
				黃黃黃玄玄		
				四九四二二		
				八九四〇四		

執照日付	正使	通事	船名	腰刀	扇	小青碗	大青盤	小青盤	金段	金紗	青素段	閃色段	綠段	白段	藍段
宣德五、一〇、一八	南者結制		永	五		二〇〇〇	二〇〇	四〇〇	二	二	二〇				
正統三、	步馬結制		永			二〇〇〇	二〇〇	四〇〇							
五、一〇、一六	楊布勃也		永	一〇	二〇	二〇〇〇	二〇〇	四〇〇			一	二	四		
(イ) 六、四、一九	阿普斯古	沈志良	安	一〇	三〇	二〇〇〇	二〇〇	四〇〇			一	一	一	九	一
(ロ) 六、七、六	達福期	梁琦	永	一〇	三〇	二〇〇〇	二〇〇	四〇〇			一	一	一	九	二
七、□、五	楊布	梁琦	永	一〇	二〇	二〇〇〇	二〇〇	四〇〇			一	一	二	九	一

- (イ) 此船遭風漂至福建州府閩縣地面自修船隻至正統七年三月内回國此文不行了
(ロ) 至本年十月初一日遭風使回本月初三日開洋此文停了

四、安南との関係

安南への遣使は正徳四年（一五〇九）十月九日付の咨文一通を

みるだけである。

この時の役員は

正使正議大夫耆員

鄭玖

副使式員 馬沙皆 梁夔
都通事 鄭昊
副通事 梁俊
管船直庫火長二名 高義 鳥是
稍水共乙百三十名
で、船は「信字号」勘合は「玄字壹佰柒拾陸号」であつて、その
積載した物は、

硫黄壹万觔
鍍金銅結束青皮兼線穿鉄甲壹付
金結束金龍靶黒漆鞘腰刀式把
金結束兼鍍金事件腰刀陸把
鍍金結束螺鈿靶紅漆鞘袞刀式把
鍍金銅結束螺鈿靶黒漆鎗式把

(註8) 琉球→旧港、咨文

日	付	発信者	受信者	正使	船名	勘合	礼物
宣徳 三、九、二四	一四二八	琉球國王中山		実達魯	天	義七	素段二〇、大青盤二〇、 小青盤四〇〇、小青碗二〇〇〇
三、一〇、五	〃	琉球國王相懷	旧港官管				素段五、鎖子甲二、袞刀二、腰刀二 摺扇一〇
宣徳 五、一〇、一八	一四三〇	〃	三佛齊國旧港 僧亞刺吳 安邦本目娘	步馬結制 達且尼			馬二、閃色段一〇、段五、羅三、 閃色段三、青段二、腰刀二

桑木弓肆張
貼金竿鷹毛翎箭壹佰式拾莖
各色嫩夏布壹佰匹
生鉄式阡觔
であつたが、之でみると日本刀が珍重されていたと云うもの
の、その中身ではなくて、その外部の裝飾に重きがおかれていた
ことが分る。

五、旧港との関係

琉球から旧港への咨文九通、旧港より琉球への咨文二通である
が、渡航は宣徳三年、同五年、正統三年、同五年の四回四隻で、
旧港の咨文は宣徳五年の琉球使節に与えたものである。(註8)

正統 三、一〇、四 一〇、二六	一四三八	〃 〃	旧港管事官 三佛齊國宝林 邦施氏大娘仔	阿普尼是	色段一一、色羅九、色紗五 漆盤中樣二〇〇、漆棧二〇〇
正統 五、一〇、四 九、	一四四〇	〃 〃	宝林邦本頭娘 〃		白段二、漆盤中樣二〇〇、漆棧二〇〇

旧港↓琉球、咨文

日	付	発信者	受信者	礼	物
宣德 六、二、三 〃	一四三一 〃	三佛齊國林邦 本頭娘 愚婦俾那智 施氏大娘仔	琉球國王 相懷機 〃	苾布二、長文節智一塊、頂□一匹、沈香一〇斤 紅花布被面一合、紅花布頂子一合、青花文佃布二合、象牙二、 淡□仙酒四埕	

こゝに注目すべきは日本に関する次の一通の文書が見えることである。

「歴代宝案」卷之四十三、山南王併懷機文稿

琉球国王相懷機端肅奉書

旧港管事官閣下自永樂十九年間准日本国九州官源道鎮送到旧港施主烈智孫差来那弗答鄧子昌等二十余名到国告乞遞送回国准此縁無能諳火長思係遠人難以久留未故擅便除啓

国王敬蒙即便差令正使閣那結制等駕使海舡一隻已到暹羅国仍行乞為転送□未知到否今有本国頭目突達魯等駕□小船一隻裝載磁器

等貨到貴国買売仍令尺楮付突達魯等前到

旧港管事官前告稟回報今備礼物馳送少伸達意万望笑留所有今去

人船煩為寬容買売趕趁風迅回国庶為四海一家永通往来便益今將

礼物開坐于后草字不宣

今開

素段五四 鎖子甲式領

袈刀式柄 腰刀式柄

摺扇拾把

宣德三年拾月初五日奉書

さてこゝに見える旧港とはどこの地を指すのであろうか。又日本との間にどのような交渉があつたのであろうか。

応永十五年（一四〇八）六月廿二日南蕃船が若狭国に來り、生象一疋黒、山馬一隻、孔雀二対、鸚鵡二対等をもたらししたことが「若狭国税所今富名領主代々次第」に見え、南蕃船來朝の初見である。^{（註9）}しかし、これより先元中五年（一三八八）暹羅国の船がわが國に來朝したことが「高麗史」に見えてゐるが、おしいことにはわが國の文獻には見当らない。^{（註10）}此の若狭國に來着した南蕃船はその後応永十九年（一四一二）六月廿一日にも二艘來り、又翌年にも來て京都へ進貢したと思われるが、それ以後は來著が絶えたものらしい。

その若狭に來たのは漂著とは思われず、地理的条件から考えて偶然とは考えられない。

（註9）「若狭国税所今富名領主代々次第」（群書類從卷五十）

一、一色修理大夫満範

同（應永）十五年六月廿二日に南蕃船着岸。帝王御名亞烈進卿。番使々臣。^{問丸}彼帝より日本國王への進物等。生象一疋。黒。山馬一隻。孔雀二対。鸚鵡二対。其外色々。彼船同

十一月十八日大風に中湊浜へ打上られて破損之間。同十六年に船新造。同十月一日出浜ありて渡唐了。

一、一色五郎御曹司義範

同十九年六月廿一日南蕃船二艘着岸有之。宿は問丸本阿彌。

同八月廿九日に当津出了。御所進物注文有之。

同二十年三月己丑小浜着岸之鉄船之公事。自内裏可有御直納之由。依武家被仰出之。当御管領細川右京大夫殿御教書應永十九年十二月十三日被成一色殿了。同二十年三月日当所仰下了。

「和漢合符」（應永十五己丑）

七月南蛮國貢黑象三頭鸚鵡大鷄等。

（註10）「高麗史」恭讓王辛未三年（一三九一）秋七月

戊子暹羅斛國遣奈工等八人來獻土物致書曰暹羅斛國王今差奈工等爲使管押舡隻裝載出產土物進奉高麗國王無姓名封識但有小印亦不可考驗國家疑其僞議曰不可信亦不可以不信且來者不拒待之以厚礼遠人不受其書以示不惑可也王引見勞之対曰戊辰年（一三八八）受命発船至日本留一年今日至貴國得見殿下頓忘行役之勞王問帆程遠近対曰北風四十日至其人或袒或跣尊者用白布韜髮其僕從見尊長脱衣露身三詛而達其意

この時の南蕃がどこであつたかについて新村博士は「帝王御名亞烈進卿」によつて「蘇門答刺島の東南部に位する三仏齊國の後なる旧港ではないか」とされている。^{（註11）}

（註11）新村出「続南蛮伝記」足利時代に於る日本と南國との關係一六七頁一六八頁

「明史三佛齊傳に、洪武三十年（應永四年、一三九七）三佛齊は爪哇に亡ぼされてから名を旧港と改め広東人梁道明が之

に拠つたこと、成祖永樂三年（應永十二年、一四〇五）旧港の頭目梁道明が入貢し、副頭目施進卿が代領したこと、同五年（應永十四年、一四〇七）鄭和が「西洋」より還る時旧港頭目陳祖義が明軍を詐謀を以て劫かさうと試みた時、右の施進卿が兵を以て祖義を戮したこと、尋で進卿は其婿を遣はして朝貢したるによつて旧港宣慰司を設けて進卿を宣慰使としたことが記載されて居る。成祖実録も略同じである。帝王亞烈進卿の遣はした南蕃船が日本に航し若狭に着いたのは其翌年の應永十五年即ち永樂六年であるから、年代も確に合ふ。而して亞烈又は阿烈は殊に爪哇にあつて尊称として用ゐらるゝらしく、明史爪哇傳に、正統元年使臣馬用良言、先任八諦來朝、蒙恩賜銀帶、今爲亞烈秩四品、乞賜金帶、從之と見ゆるそれであつて、成祖実録永樂二年三年五年の條にも爪哇國西王の使者に阿烈干都万、阿烈安達加李奇、亞烈加恩などの名が出てをり、三年の條には渤泥國使に阿烈伯成の名を認めた。されば旧港の頭目たる施進卿を日本に來た同國人が亞烈進卿と書いたことは疑ない。亞烈とは元史に人名に見ゆる阿里と同じく回語で大といふ義即ち亞刺比亞語の Ali の音訳ではないかと思ふが、広東音の烈（入声）では如何であらうかと尙疑を存してをく。」

應永十五年、同十九年同二十年に若狭國に來著した南蕃船即ち旧港船はその後日本に來たと思われることは、「歷代宝案」中の前掲の文書によつて明らかである。（註12）即ち日本（恐らくは博多）に來朝した旧港の使臣那弗答鄧子昌等二十余名を九州官源道

鎮（九州探題渋川満頼）が琉球に送り、更に本国へ転送させたことを示すものである。

（註12）應永二十年以後にも南蕃船が日本に來たことは、「満濟准后日記」、應永廿五年八月十八日の條に「自南蛮國進物到來、沈象牙藤以下々等濟々在□。」の記事によつて察せられる。

しかし、この事実を以て、藤田元春氏の云うように、この時の使臣「実達魯」が日本人であつて実太郎と云うのではないかとするの少し早計であらう。（藤田元春氏「日支交通の研究・中近世篇八三頁」）しかもこの実達魯は之より先宣徳元年に琉球国使臣として明に入朝し、更に宣徳二年には暹羅に正使として派遣されている人物である。その他「王達魯」「馬三魯」等の日本名に近いと思われる人名が使臣の中に散見するが、これらはいずれも琉球人と認むべきであつて、「達魯」「三魯」は日本名の「太郎」「三郎」のいみではあるが、日本人とはひとめられ難いのではない。いやしくも一国の正使に、僧侶ならばともかく、名も知れない商人輩の、しかも他國人を充てたとは考えられない。その上これらの人々が朝貢使となつて明に赴いている事実を考えるとき日本人と簡単に決めてしまうことは出来ないのであらう。（註13）

（註13）皇明実録にみえる明に赴いた琉球使節名（○印をつけたのは南海諸國への使臣となつたもの）

年	次	使節名	年	次	使節名	年	次	使節名
洪熙元、 閏七	一四二五	○佳期巴那 ○浮那姑 ○南者結制	〃 一〇	〃	○步馬結制	正統元、 一	一四三六	伍是堅
〃 八	〃	宋比結制	五、六	一四三〇	○阿蒲察都	〃 二	〃	陳安
〃 一二	〃	○実達魯	〃 九	〃	○佳期巴那	〃 三	〃	漫泰來結制
宣德元、 四	一四二六	鄭義才	〃 一〇	〃	魏古渥制	二、五	一四三七	義魯結制
〃 四	〃	模都古	〃 一一	〃	○郭伯茲每	三、二	一四三八	梁求保
〃 八	〃	郭伯祖每	六、八	一四三一	○由南結制	四、七	一四三九	阿普札是
〃 九	〃	○佳期巴那	〃 九	〃	謂慈勃也	〃 九	〃	李敬
〃 一〇	〃	謂慈淳也	〃 一一	〃	郭相祖每	五、二	一四四〇	梁求保
二、四	一四二七	安丹結制	七、三	一四三二	漫泰來結制	〃 三	〃	○步馬結制
〃 四	〃	○阿蒲察都	〃 六	〃	○南者結制	七、一	一四四二	梁求保
〃 一〇	〃	魏古結制	〃 六	〃	○步馬結制	〃 七	〃	吉旦坦
〃 一一	〃	鄭義回才	七、二	一四三二	○阿普尼是	〃 一二	〃	明泰
三、八	一四二八	梁義回才	八、二	一四三三	魏古渥制	九、二	一四四四	梁求保
〃 一〇	〃	○南者結制	〃 五	〃	物志麻結制	〃 四	〃	梁回
四、一	一四二九	謂慈淳也	九、三	一四三四	○鄭步馬結制長	〃 五	〃	蔡讓
〃 四	〃	○郭伯慈每	〃 四	〃	義魯結制	〃 七	〃	伍是佳美
〃 七	〃	梁密祖	〃 七	〃	○楊布勃也	一〇、一	一四四五	梁回
〃 七	〃	來未結制	〃 七	〃	〃	〃	〃	〃

五、九	〃八	〃六	〃四	四、三	〃八	三、五	〃四	二、一	〃八	〃三	景泰元、一	〃八	正統一四、三	一三、一	一二、五	〃六	一一、二	〃二
一四五四	〃	〃	〃	一四、五三	〃	一四、五二	〃	一四、五一	〃	〃	一四、五〇	〃	一四、四九	一四、四八	一四、四七	〃	一四、四六	〃
蔡寧	程鴻	蔡寧	馬俊	吳齊	蔡讓	李敬	亞間美	王察都	梁回	馬樞度	百佳尼	馬樞度	梁同	闍班那哈密	蔡讓	伍是佳美	〇阿普斯古	亞羅佳其
一四、四	一三、三	一二、三	一一、四	成化一〇、四	九、四	七、三	六、四	〃一一	五、二	〃一〇	成化四、二	六、二	五、二	〃八	三、二	〃閏二	天順二、二	六、五
一四六八	一四六七	一四七六	一四七五	一四七四	一四七三	一四七一	一四七〇	〃	一四六九	〃	一四六八	一四六二	一四六一	〃	一四五九	〃	一四五八	一四五五
梁應	李榮	梁應	程鵬	〇沈滿志	武實	蔡璟	程鵬	〇查農是	蔡璟	〇詭詩	程鵬	程鵬	王察	亞羅佳其	李敬	衛農是	吳是堪美	馬俊
一五、四	一一、三	一〇、四	七、六	六、四	〃五	四、二	〃四	正德二、四	一三、三	五、?	〃四	三、三	〃四	弘治元、三	二二、四	二〇、三	一八、三	一五、三
一五一〇	一五〇六	一五〇五	一五〇二	一五〇一	〃	一四九九	〃	一四九七	一四九〇	一四八二	〃	一四八〇	〃	一四七八	一四七六	一四七四	一四七二	一四六九
金良	梁能	陳義	梁寬	梁能	梁能	程璉	蔡賓	亞加尼施	鄭玖	梁德	麻勃都	馬仁	程鵬	皮揚那	蔡曦	程鵬	梁應	李榮

嘉靖	元、	五	一五一二	達魯加尼
三、	四	一五一四	金良	
四、	三	一五一五	鄭繩	
七、	四	一五一八	鄭繩	

琉球国の使節名を一覧する時、正使副使はその姓三字が最も多く、通事は二字名が多いのに気が付く。これは正使副使など交渉の正面に立つ者は琉球人を以てあて、通事のような貿易の実際事務に当る者は、洪武二十五年（一三九二）に琉球に帰化した明の三十六姓の人々をあてたもので、鄭・梁・紅・田・蔡・高・林・陳・沈・金・王などの人達で、貿易に当つては、これらの人々が實際上の権力を有つていたと思われる。

以上述べた琉球国の南海貿易は所謂「ゴールレス」問題にも大いに関係してくるのであるがこのことは次の機会に述べることにする。さて日本人の南海諸国への発展は何時頃始つたであろうか。少くとも嘉靖年間（十六世紀中頃）における所謂後期倭寇の跳梁以前にはなかつたのではあるまいか。従つて嘉靖以前においては日本人の南方発展は琉球に留つていたと思われる。このいみにおいて琉球の南海発展は、後代の日本人南海発展の前駆をなしたものと云えるであらう。

（終り）

